
IS last Glint

名無しの人

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S l a s t G l i n t

【Nコード】

N 5 2 5 1 Q

【作者名】

名無しの人

【あらすじ】

AC4主人公をIS世界へ送ってみたと言っ設定ですが、基本オリ主化してます。

ご了承下さい。

ACネタ地味に使用しておりますん。

キャラ崩壊がございますので、

『俺の嫁がこんなに。。。な訳が無い!!』

と言っ方は速やかにブラウザバックを押してください。

6月20日 復活しました

prologue (前書き)

プロローグなので凄く短いです

prologue

彼は鴉^{レイザン}だった。

鴉は傭兵として生き、傭兵として戦い、
そして暗い暗い水の中へ没した。

いや、没した筈だった。

しかし、彼は今——

「ここは……一体？」

再びこの世に舞い降りた。

“アナトリアの傭兵”としてではなく、

男で世界二番目に『IS』を動かすことの出来る

“レイ・イエルネフェルト”

として。

こうして彼の物語は回り始めた。

新たなる力を得て——

この先に待っているのは希望か、それとも……

絶望か

p r o l o g u e (後書き)

感想等ありましたら是非お願いします

1 - 1 (前書き)

大事なことなので何度でもいいます。

この作品での主人公は基本オリーシユ化しておりますので、皆様のイメージが崩れる可能性があります。ご了承ください。

気づけば俺は見知らぬ建物の中にいた。

おそらく中の様子から判断するに教育機関だと思うが、そんなもの俺がいた所では見かけることがないので

ここが俺がいた世界では無いことが容易に予想つける事が出来る。

「まあ、向こうでは俺死んだからな……」

俗に言う輪廻転生って奴なのか。

それにしても記憶が引き継がれる転生って聞いたことが無いな。

「……はい、では最後“レイ・イエルネフェルト”君、自己紹介宜しくね」

「は？」

ちょっと待て、今はどういう状況だ？

俺は今椅子に座っていて、“教室”の中にいる。

そして教師と思われる女性から自己紹介の催促をされている。

ここまでは納得が出来た。

しかし、問題は何故それを知っているかだ。

俺はそもそも学校と言つもの知らない。

いや、そもそも無縁のものだった。

なら何故？

ここで一つの仮説が俺の頭の中で立てられた。

それは“すり替わり”である。

おそらく俺が死んで此方の俺の人格を俺が奪い取ったからある程度の此方の世界について知っているのだろう。

「あつ、あのえつと大声出してごめんね。でも自己紹介『あ』から始まってもう最後だから

『レ』のレイ君なんだよね。だから、ね自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

……絶対この人先生には向いていない気がする。

だが自己紹介って何言えばいいのやら。
まあなるようになるか……

「そんなに謝らなくてもやりますよ」

立ち上がり周りを見るとそこは見渡す限り女子だらけ、辛うじて前の方に男子が一人いるくらいで後は全員女子。

俺が立つた瞬間の女子の視線が怖い。

何というか獲物を狙う肉食獣のような目をしている。

——だが今はそれは気にしないでおう。

「始めまして、俺の名前は“レイ・イエルネフェルト”。

まあ、気軽にレイとでも呼んでくれ。

これから宜しく頼む」

儀礼的に頭を軽く下げ、席に着く。

女子達の『もつと色々喋れよ』的な視線は完全に無視した。

そして、俺が席に着くのを確認すると、俺に自己紹介を促した先生の横の先生が話し始めた。

「さあ自己紹介も終わったことだしSHRは終わりだ。

諸君らにはこれから“IS”の基礎知識を半月で覚えてもらおう。

その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。

いいか、いいなら返事をしろ。

よくなくても返事をしろ、

私の言葉には返事をしろ」

なんという鬼教官。

と言っかそもそも、

“IS”って何だ？

1 - 1 (後書き)

肝心な記憶が引き継がれない、これこそご都合主義。
勿論主人公のISはアレですよ。

それでは感想等お待ちしております。

追伸：

活動報告の方でも書きましたが、
これからテスト勉強のためしばらく小説更新できません。
申し訳ございません。

1 - 2 (前書き)

更新遅くなって大変申し訳ありません。
テスト勉強と両立？してるため遅くなりました。

S H R が終わり、一時間の I S 基礎理論授業も丁度終わって今は休み時間。

「I S が……、なかなか興味深いものだな」

正式名称『インフィニット・ストラトス』。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。総機体数は現在 4 6 7 機。

これは開発者である篠ノ之束と呼ばれる人物が現在失踪中なためこのように微妙な数となっている。

そのため企業は新しい I S を作るためには、

一度壊してから新しいのに作り直しているらしい。

まあ大体説明はこんなものか……

A C にも通ずる所が何ヶ所があるので

操作方法など覚えるのにさほど苦労はしないだろう。

とにかく今は、

「一体俺に何のようだ、織斑一夏」

さっきから俺の目の前に立っている織斑に話しかけてみる。

男子が二人しかいないため

仲良くなっておいて損は無いだろう。

「いや、用って言うかまあこれから男子同士頑張ろうぜの意味を込めて

挨拶に来たんだが」

「ああ、そうだったのか。ならとりあえず自己紹介でももう一度しておくか。

俺の名前はレイ・イエルネフェルト、お前と同じ“地球人”だ」

地球人――、

あまり聞かない単語だが、これは俺の祖国であるフランスが貴重なIS男性操縦者を巡って世界との対立が起こることを恐れて俺へ与えた新しい戸籍だ。

ちなみに俺の前にいる織斑一夏も俺と同じ地球人だ。

「お互い苦労してるんだな……俺の名前は織斑一夏、気軽に一夏って呼んでくれ」

「なら俺のことはレイって呼んでくれ、改めて一夏宜しく頼む」

「こちらこそ宜しくな、レイ」

お互い握手を交わす。

「ところで一夏「ちょっといいか」……確か篠ノ之か、一体どうした？」

後ろを振り向くと一人の女子が立っていた。

視線から判断するに俺の後ろの一夏に用があるらしい。

「おい、一夏。お前をご指名らしいぞ、早く行ってやれ」

「廊下でいいか？」

「お、おう」

そついい篠ノ之と一夏は教室を出て行った。

教室から出て行く際それまで群がっている女子達がモーゼの十戒の如く道を空けたのは言うまでも無い。

一夏がいなくなったことで再び好奇やその他諸々の視線を浴びさせられ前途多難な予感しかしない俺だった。

そして現在、

「決闘ですわ！」

「おう。その方が四の五の言うよりわかりやすい」

「……どうしてこうなった」

落ち着いて考えてみる。

確か一夏達が教室に帰ってきて二時間目の授業が始まって、それが終わった後にイギリスの代表候補生セシリア・オルコットが一夏に話しかけたんだ。

ちよつとそこでいざこざがあつて三時間目、事件は起こった。

一夏の姉である織斑千冬先生がクラス対抗戦にでる代表戦を決めると言い出して、そこで俺と一夏の名前が上がったんだ。

するとオルコットがそれに反対して自分も立候補して、

そこであまりにも日本を馬鹿にするような発言をするのでそこにキレた一夏がイギリスの悪口を言ってさあ大変。その発言でオルコットもキレて今に至るということだ。

「で、ハンデはどのくらいつける？」

「あら、お願いかしら？」

「いやどのくらい俺がハンデをつけたらいいのかなーと」

そこまで言つとクラスから爆笑が巻き起こった。

「おい、一夏」

「どうした、レイ？」

「今の世界の現状を考えると、
今や男が強いと言う事実は既に昔話なんだぞ。
更に向こうは代表候補生、お前はたまたまISが起動できた只の男。
IS操縦の時間も違つし、それ故にどちらかと言えばお前がハンデを貰う側だぞ」

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええそうでしょうそうですね。むしろわたくしがハンデを付けて
いいか迷うくらいですわ。ところでイエルネフェルトさん、

貴方はハンデは必要かしら？」

先程までの激昂は何処へやら、オルコットは明らかな嘲笑をその顔

に浮かべていた。

「すまないな、俺も一応男としてのプライドもあるのでな。
ハンデは必要ない」

まだISを操縦した事無いがどうにかなるだろう。

流石にあそこまで馬鹿にされて引き下がる訳には行かないからな。

「話は纏まったな、それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三
アリーナで行う。

三人はそれぞれ用意をしておくように。
それでは授業を始める」

千冬先生がぱんつと手を打って話を締める。

俺も席に着き早速電話帳サイズはありそうな教科書を開いた。

「後一週間か……」

俺は誰にも聞こえないようにそう呟いた。

決闘まで後一週間――

1 - 2 (後書き)

感想等ありましたら宜しくお願いします

追伸：アニメISの六話のシャルルが可愛すぎて死にたいw
次の更新予定日二月下旬の予定。

早くIS戦闘シーンが書きたいです

1 - 3 (前書き)

あれ？テスト前日に何してるんだろ、自分w
今回はほとんど進みません。
その上短いです。

時間は移り、その日の放課後――

「おい、レイ。俺達の寮の部屋決まったらしいぞ」

呼ばれて顔を上げるとそこには部屋番号が書かれた紙と鍵を二つ持った一夏が。

「一緒の部屋か？」

「いや、違うな。俺が1025室でお前が1029室だそうだ」

と言って投げてきた鍵を片手でキャッチした。

「サンキュー」

でもちよつと待て1025室？

何処か引つ掛かる。

何か俺は大切なことを忘れてるのでは無いか？

俺が放課後聞いてた会話を思い出せ。

――ナニカサレタヨウダ

これは違う。

というか早くムラクモミレニアム社に通報しろ

――AMSから光が逆流する……ぎゃあああああああ――！

フラジールは帰れ。
これも違う。

――篠ノ之さん、部屋何処？私は1026室だけど

――私か？私は1025室だな。

これだ！！

先程の一夏も言った1025室、ということは同室か。

一夏よ、安らかに眠りたまえ、
アーメン。

「おい、なにしてるんだ？早く行こうぜ」

「……ああ、分かった」

許せ、一夏。

そう心の中で思いながら俺達は寮の部屋へ向かった。
その後一夏の叫び声が寮内に響いたのは言うまでも無いことだ。

一夏の悲鳴を確認して俺は部屋に入ると、
ダンボールが十数個積み上げられていた。
中を見てみると、衣類や、歯ブラシなどの生活必需品が入っていた。

「結構広いな……」

本来は二人で使用するはずの部屋なので一人だととても広く感じる。

「今日は色々な事があり過ぎたな……」

俺はベッドに倒れこみながらそう呟いた。

ホントに色々な事があり過ぎた。

いきなりの転生。

死んだ筈なのに気付けば見知らぬ世界で

そこで若返つての新しい生活。

そしてISと呼ばれるものに乗ることになって――

「フィオナ……、一体俺はこれからどうすればいいんだろうな……」

「

今はこの世界には居ない恩人の名を呟く。

アイツは今頃どうしているのだろうか？

泣いてくれているのだろうか？

それとも普段どおりに過ごしているのかもしれない。

所詮俺はANS適正の低い欠陥品、
それでも彼女は俺を必要としてくれた。

そして俺もそれに答えるために死に物狂いで戦った。

戦って、戦って、そして戦場で死んだ。

そんな生涯で満足したのかと聞かれると俺はそれで良かったと思う。

とにかく――

「これ以上考えても無駄だよな……寝るか」

俺はこれ以上考えるのを辞めて眠りについた。

1 - 3 (後書き)

今回後半シリーズモドキでw

やっと次回にはISを出せるかな・・・と。

そして次回の更新は、未定です・・・

おそらく早くて二十日以降かな、と。

感想等貰えると嬉しいです。

それでは

1 - 4 (前書き)

どうもお久しぶりです。

今回いつもより少し長いです。

チートやらそこ等辺の表現が嫌いな方はブラウザバック推奨します。

そしてあの日から一週間も経ち、
今日は決闘日当日。

あの時二日後に来ると言われた俺の専用ISは
結局言われていた日の更に二日後に到着して、
そこから短いながらも実機練習に入った。

動かしてみると多少の違和感はあるものの思い通りに動いてくれた。
自分の体のように動かせる分、
ACよりも動かしやすかった。

で、今俺達は決闘のために第三アリーナのピット搬入口に
来ている訳で、

「一夏よ、どちらから先に行く？」

「いや、そこはお前だろ！！どうみても搭乗時間から見ると
お前の方が上だろ！！」

と言っても三日程度しか変わらないんだがな。
それにしてもこのままだとずっとこの繰り返しか……

なら……決着を着ける！！

「最初はグー、ジャンケン……！！」

「おい！！人の話を……！！」

一夏が何か言おうとしてるが時既に遅し。

俺は振り上げた手を既に振り下ろしかけている。
慌てて一夏も自らの手を出そうと腕を突き出すが、
人間いきなりの状況で出す手は大体――

「俺の勝ちだな……！さあ、一夏行つて来い」

「それはどうかな？」

「何！？こ、これは……！！」

俺が出した手はパー。

そして一夏が出した手は――

「チョキ……だと……」

「俺が焦っているからグーを出すと思って様だが、
それは只の演技だ！！」

まさか最初からコイツは俺がジャンケンをする事を知ってて
敢えて俺の罠に引っ掛かったフリをしたのか。

一夏、恐ろしい子……！！

「フツしょうがない、なら俺が先に行くか」

「さっさと行つて来い」

パンツッ!!

業を煮やした千冬先生からの出席簿チョップ。
弾ける様な打撃音、凄く痛いんだが……

「はいはい、行きますよ……」

「『はい』は一回でいい」

パンツッ!!

再びの打撃音。

ホントにこの人教師なのだろうか？

「……了解」

俺はため息を付きながらも、ピットゲートの方へと向かう。

そして、ISを起動させる。

「——さあ、行こうか『ホワイト・グリント』」

一気にISが展開される。

その形状は俺が生前使用していた愛機に酷似しており、
違いといえば頭と胴体を覆うものが無いくらいだ。

同時にハイパーセンサーも作動し
俺に様々な情報を伝える。

—— 戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。
ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。
特殊装備あり。

中距離か、少々面倒だな。
でもやるしかない、か。

—— 『敵』はもうすぐそこにいるのだから。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「あれだけ言って来ないって言うのもなあ……
ところでオルコット、この試合今からでも無しにしないか？」

「それは無理な相談ですわね」

—— 警告！敵IS射撃体勢に移行。

「なぜなら既に試合は始まっているのですから！」

オルコットが手にしている銃器レーザーライフル《スターライトmk?》が
一瞬光ったかと思うと次の瞬間には俺の体を撃ち抜かんと迫ってきた。

「人の話を聞けって！……もう無駄か」

それを間一髪の所で避け、
俺も装備一覧を開きそこから装備可能な物呼び出す。

「装備出来るのが少ないな……」

とりあえず俺は左手にアサルトライフル、
右手にライフルを展開した。

射程距離を考えると向こうのほうが有利だが、
機動力なら此方の方が断然上なんだよ

「一瞬で勝負を終わらせる！！」

オーバーブースタを用い、一気に接敵する。

「なっ！！センサーが反応し切れてないですって！！」

オーバーブースタを使えば200メートルくらいなら数秒で到達する。

流石に時速1000キロメートルは出ないみたいだが、
しかしそれでもこの世界においては十分すぎるほど出てる。

それこそ相手が接近に気付く頃には――

「やあ、オルコット。早速で悪いが勝たせてもらつよ」

「っ！！」

もう相手の眼前に迫っている。

俺は装備を両手を近接ブレードに変更し、

切る、切る、切る――

みるみる相手のシールドエネルギーが減って行く。

相手の反撃を許しては行けない。

俺のシールドエネルギー残量は残り僅か、

OBはそれほど燃費が悪いのだ。

なので一撃でも喰らえばそこでゲームセット。

（でもおかしい。今俺は絶対的に有利な立場にある筈だ。

なのに何故だ？このいやな予感は。

相手は中距離武器しか装備をしてない筈。

いや、待て――）

最初敵の情報として俺に何を伝えた？

――戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。

ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。

“特殊装備”あり。

コレか！！

その瞬間、オルコットが微かに笑うのが見えた。

シュンッ!!

——その時俺の目の前を一筋の光線が通過した。

1 - 4 (後書き)

長くなりそうなので二話に分けます。

次の更新は、いつになるんだろ？

ともかく早い更新目指します。

感想等ありましたら宜しくお願いします。

1 - 5 (前書き)

二日連続更新・・・だと・・・!?!?
馬鹿な、ありえるのかこんな(r y
自分でも驚きの二日連続w

やっとテストの前半戦も終了。
後二日だヒッハー!!

最初は一夏視点でお送りします

俺はその光景が信じられなかった。

「千冬姉！あの機体一体どうなっているんだ！」

「落ち着け、馬鹿者。それと学園内では“織斑先生”と呼ばべ」

千冬姉が画面を何か操作している。

「出たぞ、あの機体名は『ホワイト・グリント』
フランス製の第三世代IS、ということになっている」

確かにスクリーンに出てきた文字はフランス製を示す文字。
だが、

「それだけ？」

「ああ、それだけだ。そもそもあれがフランス製かも怪しい。
基礎フレームはラファール・リヴァイヴに似ているが、
それ以外は何処の物とも一致しない。

それになんだ？あのスピードは……まさに白き閃光
ホワイト・グリント
の名に恥じない動きと言うことか」

まさにそれは閃光。

瞬間時速700キロメートルオーバー。

正に化け物である。

「しかし、織斑先生。あのスピードで搭乗者のイエルネフェルトは

大丈夫なんでしょうか？」

横にいる筈が千冬姉に問う。

幾らISでもあの速度ならば相当の重力が掛かるはずだ。

「その分には問題ない。

理論上はISはあの速度でも搭乗者を守りきれる。

それにしても……」

そこで千冬姉が一旦切る。

「アイツはまだISに乗り出して三日足らずらしいんだが……」

それを聞いて俺も含めその場にいた全員が驚愕した。

レイ、一体お前は何者なんだ？

俺は反射的に距離を取った。

「今のを避けるとは中々やりますわね。

最初の攻撃には少々焦りましたが、これで形勢逆転ですわね」

良く見るとオルコットの周りには四機のフィン状の物が浮いている。

「それがお前の特殊装備ということか」

『ブルー・ティアーズ』それがあの自立機動兵器の名前だ。

構造はフィン状のパーツに直接特殊レーザーが付いているBT兵器である。

ややこしいがそれを搭載しているから機体名もそのようになったらしい。

「あら？ご存知でしたのね。では話が早いですわ、そろそろ閉幕と参りましょう」
ファイナレ

そついいながらオルコットが右手を振るうと今まで停止していたビットが一斉に動き出した。

「貴方のシールドエネルギー残量も残り僅か。決着は着きましたわね」

笑みを浮かべながらライフルを構えるオルコット。
だがそれはお互い様だ。

「そついうお前も残量は僅かな筈だが？」

「ええ、その通りですわ。」

しかし、二度と貴方の攻撃は私には届きませんわ、そつ二度と」

確かにその通りだ。

おそらく俺がこのまま突っ込めばあのビットの餌食になるだけだろう。

「だからまずはそのビットから落とす！！」

武器をレザブレから銃器に切り替え、
まずは一機俺の正面にあるビットを撃ち落とす。

「ほら、どうした俺に勝つんじゃないのか？お前の持つてる銃は玩具か？」
「」

するとオルコットは悔しそうに唇を噛み締めながら、

「う、うるさいですわ！！そんな事貴方には関係ないことでしょう！！」
「」

——読めたぞ。

恐らくこのビットを操作している間はオルコットは攻撃出来ない。

ならば——

とにかく突っ込む。

それしか今の俺には残されていない。

オルコットもそれに対してビットで対応するが、俺のISの速さを舐めてもらっては困るな。

OBを使わずともそれ相応の速度は出るのだ。

そして、

「今度こそ終わりだ！！」
「」

接敵し両手に持つ銃でオルコットへ向けて撃ち続ける。

ビットも此方へ向かってくるがもう遅い——

『試合終了。勝者——レイ・イエルネフェルト』

その直後試合終了を告げるブザーが鳴り響いた。

「ふう……やつと終わったか」

俺はピットに戻りISを解除するなりそう呟いた。

やはりまだ本調子とは行かないようだ。

前だったらピットを展開する前には倒せていたのだがな……

（やはり練習は必要、か）

今後の練習内容などを考えていると一夏達がやって来た。

「一夏、次はお前だぞ」

「それが俺の試合は明日に延期だつてよ」

「え？」

「それがさあ俺にも分からないんだよ、いきなり千冬姉が『延期する』って言い出したから。」

だから今日はこのまま寮に帰ろうと思うんだけど、レイはどうする？
「」

「ああ、俺か？俺は暫く此処でISの動きとか再確認してから戻るが、

というか一夏。

お前は明日試合なのに呑気に寮に帰っていいのか？

少しは届いたISに乗ってみろよ」

コイツは確か一度動かしたつきり一度も乗ったことが無い筈。

ならば折角の今日という練習時間を大事にして欲しいものだが……

「それとアリーナの使用も今日は無理らしいぞ」

「……………そうか」

こうして俺も寮への帰宅✓が確定した。

1 - 5 (後書き)

よく考えてみたら、ホワイトグリントって
多少ラファール・リヴァイヴに似てないか？
と思った今日この頃。

何かあの背中 of 翼といい (ry

……似てないですか、そうですか。

まあいいや。

ところでここらで一ツアンケートなんですが主人公のIS ホワイト・
グリントを作った会社名何にすればいいと思いますか？

感想等含めこのアンケートの回答もお待ちしております。
皆様のフロム脳に期待しています。
それでは

追伸：アンケート期限2月23日まで。

1 - 6 (前書き)

今回短いです。

予めご了承ください。

次の日となり今日は一夏の番な訳だが、

わずか開始数分で――

『試合終了。勝者――織斑一夏』

試合終了のブザーと共にその声がアリーナの中に響いた。

俺はその試合の様子を見ていなかったのだが、

一夏曰く、

「心ここに在らずって感じだったな……何も反撃してこなかったし」

との事だ。

昨日何かあったのだろうか？

まあ俺には関係ない事だが。

そんなこんなで、翌日の朝のSHR。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です」

山田先生からクラス代表決定について発表される。

まあ、妥当だよな。

俺は昨日断つといたし、

一夏は“一応”オルコットに勝ってたし。

「先生、質問です」

一夏が手を挙げる。

質問は手を挙げてする、これは基本だな。
偉いぞ、一夏。

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に一応勝ったんですが、レイの方が適任じゃないんですか？」

「それはですねエルネフェルト君が辞退したから、織斑君になったんですよ」

「まあ、一夏。実戦経験積めるからいいじゃないか」

こいつに足りないものは場数を踏むことだ。

ISはスペック高いし、一夏自身戦闘センスもある。

という事は後は経験を積ませればこいつは化けるだろう。

「それはそうだが、はあー……」

一夏のテンションに対してクラス全体のテンションは反比例状態で上がりまくっていた。

しかし入ってきた千冬先生の一声でそれが静まったことは言うまでも無い事だ。

「と、ところで、“レイさん”」

SHRも終わり一時間目の授業の前の休み時間にいきなりオルコットに話しかけられた。

ん？——今俺の事を名前で呼んだか？

「どうした、オルコット。俺に何か用か？」

「よ、宜しければ今日の放課後、私とい、一緒にISの訓練をしていただけませんか？」

「ああ、別に構わないぞ。丁度俺もビットの対処方法を練習しとかないとなと思っていたから」

それを聞くなり今までの不安そうな表情から一変。嬉しそう表情になり、

「そうですか！それは良かったですわ。でっ、では、今日の放課後アリーナで待ってますわ」

そこまで言うとおルコットは足早に自らの席に戻りだした。

「一体なんだったんだ、あいつ？」

「おい、レイ。セシリア一体お前に何の用だったんだ？」

「ん？ああ、何か放課後ISの訓練に付き合わされることになった。一夏、お前はとうする？」

「俺か？あー、俺も行こうかなー……第ー、放課後一緒にISの訓練しようぜ」

「わっ私か！？一夏がいいなら別に構わんが……」

「じゃあ、決まりだな。」

「ということでレイ、放課後宜しく」

「ああ」

丁度良いタイミングで千冬先生も来たので俺たちは席に戻り、授業の準備取り掛かった。

そして、放課後第三アリーナにて――

「お前が持っているそのインターセプトは飾りか！！」

「相手を近づけさせませんから必要ありませんわ！！」

「じゃあ、今の状況を説明してもらおうか？」

今の状況、俺がオルコットに長至近距離でショットガンを乱射している、以上。

「そっそれは……」

「アイツ等頑張ってるなー、俺たちも……うわっ！！いきなり何するんだ、篤」

「余所見をしているお前が悪い！！」

日本の量産IS『打鉄』を装備した篠ノ之が一夏へ切り掛かっていった。

学園からレンタルらしいが、

今更ながらこの学園一体何機のISがあるのだろうか？

最低でも1クラス分のISはあるのだから30機以上だよな。

全部で467機のうちの30機以上ってだいぶ凄いな……

発明国の特権って感じか？

その後数十分程度練習した後分かれたのだが、

オルコットの態度の豹変振りが印象に残った一日だった。

……まさか、ねえ？

1 - 6 (後書き)

何やかんやでもう7話目。

更新遅いのは自覚しています、本当すいません。

次回の更新もまた遅れるかもと言っね……。。
もう、申し開きが出来ません。

感想等あれば宜しくおねがいします。

追伸：アンケート回答皆様ご協力有難うございました

1・7（前書き）

しばらくは原作路線で行きますが、
途中からオリ展開へ持つて行きます。

光陰矢のごとしという諺が日本には存在するが、全くその通りであると、思った今日この頃。

入学時は満開であつた桜も今となつては花は枯れ、うつすらと緑の葉が生い茂っている。

授業も座学から実技演習へ移り、次第にIS学園という感じが出てきた。

今日はグラウンドでの授業なわけだが、

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、イエルネフェルト。試しに飛んで見せろ」

千冬先生の凜とした声が響く。

ここで1つ余談だが俺は他のISと違い待機状態が無い。よって更に細かいイメージをしなければならないのだが、

(行くぞ、ホワイト・グリント)

1秒もかからずISが展開される。

やはり親しんだ愛機なのでイメージがしやすいということなのだろうか。

それとも俺がイレギュラーと言うことと何か関係があるのか、しかしそれを考えても今更という感じである。

一夏とオルコットもIS展開をしたようだが、
ここで俺との違いが良く分かる。

どうしてなのかは分からないが、俺のISは浮遊してないのだ。
一夏達、というか一般のISは皆地面から十数センチ浮いているの
が普通らしいのだが、
俺のは地面に付いてる。

その分地上での戦闘が有利な分俺には好都合だが。

「よし飛べ」

言われて、オルコットは早かった。

急上昇し、遥か頭上で静止する。

一夏もその後を追うように上昇したが、オルコットよりはだいぶ遅
いものだった。

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

千冬先生からのお叱りの言葉を受けながらも一夏もオルコットのい
る地点まで到達した。

次は俺の番だが、

急上昇、急下降は『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で行
うらしい。

それを意識しつつ飛ぶぼうとしたのだが、

「イエルネフェルト、代表決定戦の時のようなスピードでは飛ぶな
よ。」

全く他の生徒に参考にならない」

「……了解」

釘を刺されてしまったので普通に飛んで上がる。
心の中でOBはそもそも垂直方向には使えないんだけどな、と愚痴る。

「あら？レイさん、私と戦ったときに使った……えっと何でしたっけ？」

「オーバードブーストだ」

「そうそう、それですわ。で、そのオーバードブーストは使いませんのですの？」

「織斑先生から止められた。何でも全く参考にならないだとさ」

「そ、そうですか」

「お前等、俺の存在を忘れてないか！？」

「あら、一夏さん、いつらしゃいましたの？気付きませんでしたわ」

「お前等なあ……………はあ……………」

一夏が盛大なため息を吐く。

「それではお前達、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から数センチだ」

再び千冬先生から指示が入る。

「了解です。ではレイさん、一夏さん、お先に」

そう言つてオルコットは地上へ向かう。

その小さくなつていく姿を俺達は少し感心しながら眺めていた。

「上手いもんだなあ」

「ああ、そうだな」

完全停止も難なくクリアしたらしい。

——俺も行くか。

「じゃあ、一夏お先に失礼」

そう言つて俺も地上へ向かう。

段々近づいてくる地面を見ながら、
ブースタを消すタイミングを計る。

そして、無事到着。

地面のギリギリ一センチメートル前後というところか。

さて、次は一夏の番だ。

結論から言つと、一応“到着”した。

しかし、それを専門用語で言つと“墜落した”と言つが。

何というか、うんシュールだ。

大きなクレーターを作り頭から突き刺さる一夏、
危ない人過ぎる。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言つた。グラウンドに穴を開けて

どうする」

「……すみません」

ISのシールドバリアのおかげで一夏自身は無傷だが
心はクラスメイトからくすくす笑いにより無傷とは行かなかったら
しい。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

そう言つて千冬先生は一夏が墜落して出来たクレーターを指差す。
土つてそもそも何処にあるのか？

先程の衝撃で飛び散つたが……そこから拾つて来いと言いますか。
流石に一夏の事を不憫に思い手伝うことにした。

「一夏、俺も手伝うぞ」

「すまん、ありがとう、レイ」

こうして俺達はグラウンドを片付けるために一時間を費やした。
一夏がIS操縦をものにするには、まだまだ先が長いようだった。

懐かしい夢を見た。
そうコレは俺が死んだときの夢だ。

沈んでいく――

今や通信機能も停止し、

俺は独りコックピットの中で死ぬだろう

これは報いなのかもしれない、

何人も何人も殺した俺への

沈んでいく――

コックピット内には水が進入し、

いよいよ死への時間が刻一刻と迫ってきた。

そして、俺は――

「……さん、…イさん、レイさん!!」

気付いたら俺は寝ていたようだ。

起きると目の前には見覚えのある金髪が。

「オルコットか……、今は何時間目だ？」

「レイさん、もう今は放課後ですわ。さあ、早くアリーナ行きましょう!!」

「おっ、おい!!そんなに引つ張るなって」

「時間は待つてはくれませんわ！さあ、行きましょう！」

そう言つて俺の腕を引つ張るオルコット。
そこでふと思う。

「そついえばオルコット、一夏達はどこいった？」

「一夏さん達は先にアリーナへ行かれてしまいましたわ」

「ということは俺を待つていてくれたのか、ありがとなオルコット」

俺が礼を述べると、オルコットは頬を紅く染め、
俯きながら、

「とつ、当然の事をしたまでですわ！！そつそれより早く行きます
わよ！！」

そして俺はそのまま引つ張られアリーナに連れて行かれた。

アリーナに着き俺達を待ち受けていたのは、

「久しぶりね、一夏」

「鈴……？お前……鈴か？」

良く分からない状況だった。

アリーナに今まで居たはずの篠ノ之ですら今の状況が
把握出来てない様だ。

一夏の横にいるのは恐らく何処かの代表候補生だろう。

ツインテールもこの学校ではあまりいないので目立つのだが、更に目立つのが制服だ。

この学園ではある程度の制服の改造は認められていて、オルコットはフリフリしたもの付けてるし、他の奴等も自分勝手に改造している。

一夏の目の前にいる少女も例に漏れず、肩の部分を出すという謎の改造を施している。

一夏はどうやらその少女と知り合いのようで、色々と積もる話もあるのだろう、完全に自分達の世界へ入ってしまった、二人。

結局、それが二時間ほど続き俺達は一夏と少女を放置して練習を始めて、後で篠ノ之が一夏に先程の少女の事について問い詰めていたのは言うまでも無いことだ。

1・7（後書き）

あれ？一夏が空気化している

それにセシリアさんがちゃんとヒロインしているw
シャルやらいつ出せるんだらうorz

追伸：お気に入り登録件数100件だと！？

マジかよ！？夢なら覚めr

皆様ありがとうございます。

これからもこの小説を宜しく願います

それでは、感想等ありましたらお願いします。

1 - 8 (前書き)

更新遅くなってすみません。
花粉症が予想以上で全俺が泣いた。

ISという化け物が出現して、世界は一変した。

男尊女卑の世の中から、一気にISを動かすことの出来る女性優遇の女尊男卑の世の中へと変わってしまった。

今や男は女性達からは奴隷か、それに準ずる物としか見られてないのである。

それほどISが世界に与えた影響力は大きい。

男達は「はい、そうですか」と、その境遇に賛同するしかなかった。いや、そうするしかなかった。

現行の兵器ではISには傷一つ付けられなかったのである。

それを表す事件がIS発表後約1ヵ月後に起こった『白騎士事件』である。

日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一齐にハッキングされ、

2000発以上のミサイルが発射されるも、その約半数をIS『白騎士』が迎撃した上、

それを見て『白騎士』を捕獲もしくは撃破しようと

各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件。

その結果、現行の兵器を製作していた人達の多くは辞職を余儀なくされた。

そこで三年前の此方の俺はそれに目をつけた。

その中から有能な人材を引き抜き、

IS開発の人材として再び雇った。

そして此方の俺の目に狂いは無かった。

彼等は様々な部門で成果を挙げ、
今や世界でも1、2を争う技術力を持つ企業『ラインアーク』とな
った、
しかし、その実態は

『変態共の巣窟』である

突然だが俺は今フランスに来ている。
何でも至急伝えたい事があるとの事だ。
学園の方には既に連絡は入れてある。

「お待ちしておりました、レイ様。さあ、此方の車に」

数時間の飛行の末に空港に到着すると、そこには既にお迎えの人が
来ていた。

「ご苦労」

そう言い、乗り込むと男は車を発車させた。
それにしてもフランスか……………

此方の俺の記憶が正しければ嫌な予感しかない。

デユノア社からの技術提供の催促があまりにも多いため相当精神的
に参っていた俺だが、

最近は全く来てなかったので安心していた。

至急の用事とはコレのことか…………

此方の俺も色々な意味で苦労してたんだな…………

「今回の至急の用事とは一体何の事なんだ？」

「どうやらまたデュノア社の者が訪問してきているらしいですが、何でも第三世代ISのデータを寄越せー、とか」

「はぁー……」

ため息を吐く。

我が社では既に第三世代のISは完成している。
対してデュノア社は未だに第二世代止まり、
相手が欲しがるのも無理は無い。

だが此方も一切の得にならない技術提供はしたくはない。

「また俺が断るのか……たまには他の人で勝手にやってくれればいいのだが」

「それは無理ですぜ、やはり社長であるレイ様がやらないと」

「そうだよな、はぁー……」

再びため息を吐く。

ため息をしたら幸せが逃げていくと言うが、
一体どれだけの幸せが今の間に飛んでしまったのだろうか？

と、そんな事を考えて間にどうやら目的地に到着したらしい。

「着きましたぜ、レイ様」

「ああ、ありがとう」

礼を言い、車を降りてまずその会社の敷地面積に驚愕する。

「ここは一体IS学園何個分だ!？」

IS開発と兵器開発そして特殊兵器開発の三つの部門が同じところに建設されているから

それはしょうがない事なのだが。

「レイ様、そんなところに突っ立ってないで早く来てください!!」

「

玄関で待ち構えていた人が此方へ痺れを切らして走ってきた。

此方の俺の記憶だと、確か

「ああ、すまない、マーシュ」

此方の世界にもアブ・マーシュという人物が存在がいたことにも驚きのことだが、

更に驚くべき事は此方の世界でも彼が『ホワイト・グリント』を製作していると言う事だ。

「謝るのは後でいいですから、早く来てください!!」

そう言っただけに急ぐよう促す。

毎回の様に四十代のおっさんが来て、土下座しながらお願いしてくるので、

マーシュもうんざりしていた筈なのだが今回は何か事情が違うみたいだ。

人の土下座というのは見せられてうれしいものでも無い。

ましてやそれがその社長なのだから尚の事。

小走りで走ること数分、ようやく応接間に到着した。

マーシュを下がらせ、

ドアを開け、俺を待ち構えていたものは――

「は、始めまして！！父の代理で来ましたシャルロット・デュノアですー！！」

「……………は？」

誰だこいつ？

確かにデュノア社長には子供がいたが、こんな奴じゃなかった気がする。

前会ったときは、確か何年前だったか……
単に俺の記憶が忘れているだけか。

そつ、結論付けて話を続けることにする。

「今更何の用だ？俺は技術提供はしないと何度も言った筈だが」

「実は僕もあまり詳しくは知らないんです。只これを渡せとしか……」

そう言つて俺に渡してきたのは、一通の封筒。

その封を切り、中に書かれている内容を見て唖然とした。

――拝啓、レイ・イエルネフェルト様

娘好きにしていいるから、第三世代ISのデータ寄越せ。

うん、要約するところのことだ。

多分、間違っていないはずだ。

「確かシャルロットだったか？お前実の父親から捨てられてるが大丈夫か？」

「ああ、はい……………つてええ！！ちよつと貸して下さい！！」

そう言いシャルロットは俺から封筒を奪い取ると、その内容を読み始めた。

何故俺が名前で呼ぶかというと、

何か『デュノア』という言葉にアレルギー反応が現れるからさ。その名前を聞いただけで鳥肌が立つ。

「……………本当だったんですね。これから僕はどうすれば……………」

内容を確認し終わるや否や凄じ落ち込みよつのシャルロット。

「と言うかこれ冗談だろう。
流石にあの阿呆も実の娘を好きにしろとかそんなこと書く訳ないだろう」

「実は僕はあの人の本妻の子じゃなくて、
あの人と愛人の間に出来た子供なんです」

そこで一旦区切ってシャルロットは自分の身の上話を話し出した。

父親と別々に暮らしていたことや、

二年前に引き取られそこで、

彼女自身高いIS適正があったため道具のように扱われていたことなど

話してくれた。

しかし、それでも俺はコイツを使用しようとは思っていない。
実はこの話は嘘でスパイなのかもしれない、可能性を考えていくと
キリがない。

「お前の話は分かった。しかし……」

そこまで俺が言ったところで、応接間のドアが開け放たれた。

「誰だ！！今は来客中だぞ！！」

「すみません、レイ様。

でもその子の話を聞く限りどうしても嘘をついてるようには思えません。

だからどうでしょう、その子を此方で引き取っては？

高いIS適正も持つてる事だし、テストパイロットが今不足してましたよね？」

「確かにそうだが……、お前達はそれでいいのか？」

「これは我々IS開発班の総意です。
先程多数決で決定しました」

「お前達がそこまで言うなら仕方が無い。“ヘッジホッグ”のデータを送ってやれ、
アレなら元がラファールと同じだからあちらでも作れるだろう」

「了解しました！！」

そう言い、マーシュはその場から走り去っていった。

——ヘッジホッグ

我がラインアークが作り出した第三世代IS。

大層な名前だが日本語では『ハリネズミ』である。

主兵装は背中に付いた十数基のワイヤーブレードである。

拡張領域はラファールの後継機のため例に漏れず、

その搭載量は多い。

しかし、射撃主体のラファールと違い、近接適正の方が高いため搭乗者を選ぶ傾向にある機体だ。

元がラファールなため安いコストで生産できるのが特徴である。

「ということだ、俺としては些か不安だがこれからはお前はシャルロット・イエルネフェルトと名乗れ。

それと俺の前では『デュノア』の四文字を口にするな」

「はっ、はい」

「これから俺達は家族だからそんな敬語も要らん」

「うん、じゃあこれからよろしくお願いし……よろしくね、レイ」

「此方こそ宜しく、シャルロット」

俺達は握手を交わし、

この場は一時解散となった。

1 - 8 (後書き)

会社名出しました。

結局の所は『ラインアーク』となった訳ですが、
他は後々出します。

感想等ありましたら宜しく願います。
それでは

1 - 9 (前書き)

原作無視しています。

原作のイメージが壊れると言っ方は速やかにVOBでブラウザバックを

それでもいいという方はこのままどうぞ

それは何気ない会話の中で放たれた一言、

「——ところで、オルコット」

「前から思っていましたけどレイさん、私の名前はセシリア・ウォルコットですわ」

シャルロットの件から一週間後、
俺はIS学園に戻ってきていて、シャルロットを此方に転入させて、
まあ普通の日々を過ごしていた。
そして、その中での衝撃的な言葉。

「……まさかとは思うがお前の家族にリリウムと言う名前の奴はいるか？」

「あら？良くご存知ですね。確かに私の双子の姉の名はリリウム・ウォルコットですわ」

外れて欲しい、思っていたがどうやら俺は神から嫌われているらしい。

「そういえば、この前レイさんの話をしたら興味を持っていましたわ。」

近々此方に転入してくるとか」

（嫌な予感しかない……）

向こうでは直接的な関係は無かった筈……、
いや、一度カロード本部で会ったかな？

「そういえば、今日一夏見ないけど何処行ったんだ？」

「一夏さんなら今日はクラス対抗戦の一回戦目の準備のため、
第二アリーナに行ってますわ」

一回戦目ということは一夏曰くセカンド幼馴染の凰鈴音か。
確かISは中国の第三世代甲龍、
データを見た限りではそこまで強そうな感じしなかったんだがな。
あの龍咆は厄介だが、白式の機動力を持っていればそう苦戦はしないだろう。

別に観戦に行く必要は無いだろう。

「お前達、席に着け。SHRを始めるぞ」

千冬先生の声とともに俺達は席に着いた。

そして現在――

「何で開かないのよ……！」

「嘘でしょ……！」

「誰か開けてよ……！」

その場を表す言葉は阿鼻叫喚まさにその通りの状況である。
生徒達は開かない扉に殺到し、
怪我人が出ても可笑しくない状況に陥っている。

時は遡り、数分前――

結局シャルロットに連れられアリーナにやって来た俺を含め4人は、
一夏達の試合を観戦していた。
そして誰しもが一夏の勝利を確信した矢先の出来事だった。

ズドオオオオンッ！！

突如大きな衝撃がアリーナ全体に響き渡った。
凰の衝撃砲ではない、威力や範囲も桁違いだ。

ステージ中央からはもくもくと煙が上がっている。
しかし、その正体を確認する前にいきなりアリーナの遮断シールド
が作動し、
おまけに扉もロックされ今に至る。

「アンノウンの襲撃とは予測してなかったな、ホント一夏は歩けば
イベントを起こすのか？」

「ちょっとレイさん、そんな呑気な事を言う前に一夏さん達の救援
に」

「そうだよ、レイ。今はそんな悠長な事は言ってられないよ」

「そうは言ってもな、この場での独断行動は逆に物事を悪化させる
だけだ」

「確かにそうだけど……」

「まずは先生達と連絡を取って、それからだ。と言っことで織斑先生聞こえますか？」

『聞こえているぞ、イエルネフェルト』

「今から一夏の救援に入りたいのですが、宜しいでしょうか？」

『お前の實力なら問題ないと思うが、遮断シールドを破壊しない事には進めない事は分かっているな？』

「それは大丈夫です、此方も策は用意してあるので」

俺はそう言つとホワイト・グリントを展開し、

両手に最近兵器開発班が作り出した、武器名K I K U所謂パイルバ
ンカーを装備した。

「それはシールド・ピアース！？」

確かシャルロットは俺の所に来るまで乗っていたISにコレと同じ
ような装備が
搭載されていたんだっけか？

「一応同じものだが、威力は比べ物にならない。
まあ、実用性は皆無だが」

そう、威力は高い反面ブレードレンジがあまりにも狭く、更には装
弾数も少ない。

そのため余程動きが遅いISか固定砲台には最強の切り札になるが、それ以外には余り使い道が無い。

それに比べるとシャルロットの言うシールド・ピアスは威力はコレより低い、リボルバー機構により連射も可能となっているため

使い勝手が良い。

「じゃあ早速壊させてもらうか、ウォルコットは来るなら来てもいいが、自分の身は自分で守れ。

シャルロットはここに残れ、まだIS届いてないだろう？」

「了解ですわ」

「……分かった」

「そつえば篠ノ之は何処行った？」

先程までは俺たちと一緒に居た筈だが……」

その時、アリーナのスピーカーから大声が響いた。

『一夏あつ!!！』

「この声は篠ノ之か!?こんな時にっ!!」

このままだと篠ノ之が危ない。

俺は急いで遮断シールドを破壊し、アリーナ内に突入した。

そこに居たのは深い灰色をした全身装甲のISだった。

腕が以上に長く、そこには遮断シールドを破壊したと思われるビーム砲口が左右合計四つあった。

『男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!!』
』

再び大声。

「一夏、救援に来たぞ」

「レイか、来てくれたのか!!」

一夏と合流を果たすとそのアンノウンは今の館内放送、その発信者に興味を持ったようだった。

「まずい! 第逃げ——」

一夏はそこまで言うと

間に合わないことを悟ったのか、

白式を突撃姿勢へ移行、瞬時に加速する。

どうやら俺が出る幕は今回は無いようだ。

白式は鳳の衝撃砲を受け、加速した状態でアンノウンの右腕を《零落白夜》により切り落とした。

そしてすかさずウォルコットのブルー・ティアーズの四機同時狙撃がアンノウンを打ち抜く。

ボンッ!!

と小さな爆発音を起こし、アンノウンは地上に落下した。

「ふう、何にしてもこれで終わ——」

「残念だが、まだ終わってないぞ」

一夏を打ち抜こうと構えた左腕を俺がブレードで切断し、
アンノウンは完全に動きを停止した――

1 - 9 (後書き)

感想等ありましたよろしくお願いします。

アンノウン襲撃後、第二アリーナにて

「さつきはありがとな、レイ。最後、お前がいなかったら危なかったぜ」

「いや、気にするな。それであのアンノウンの正体は？
どうせ織斑先生に聞いたんだろ？」

「ああ、千冬姉曰く何処の国にも所属してない文字通り正体不明アンノウンだとき。

機体は俺たちが完全に破壊してしまったせいでデータが取れなかったと小言も言われたぞ」

「それはご愁傷様だな。まあ流石にあそこまで壊れていてデータが取れた方が可笑しいがな

（それにしても無所属の無人機か……これは何か裏がありそうだな）

「

「どうした、レイ？考え事してるみたいけど」

「いや、なんでもない。それより早く寮に戻ろうぜ、皆待ってるだろ」

そう言い俺は先ほどまで考えていたことを一夏に悟らせまいと踵を返し

足早に寮へ向かった。

「おっおい！！歩くの早いつて」

一夏を放置して。

しかしその時は気付かなかった。

『
』

その様子を見ている者がいたとも知らずに……

『IS学園に向かわせた無人機はどうなった？
』

ISのネットワーク越しに聞こえる声は若く、まだ二十代かその前後くらいの男の声だ。

顔は見えないがその声からは何ともいえないオーラのようなものが伝わってくる。

『撃破されあちらに回収されてしまいました。如何いたしましたしょう？
』

対してそれに応答している声は前者に対して、一般的な十代後半の少女の声と言っている。

しかし、彼女が漂わせてる雰囲気はおおよそ十代の子のものではない。

例えるなら鋭利な刃物を思わせるような感じだ。

『構わん、どうせあれはただの様子見捨て駒に過ぎん。で、本題は見つかったのか“アナトリアの傭兵”は？
』

男から発せられる“アナトリアの傭兵”というこの世界で住む者が知っている者ではない単語。

それがこの男がこの世界の人間では無いことを示している。

『はい。先ほど私の部下が連絡を入れてきました。ISの形状も酷似している、と』

その発言に対して少女は何の疑問も無いように答える。

『ならいい、よくやった。これで計画は第二フェイズへ移行し本格的に私たちが動き出す時が来た』

『此方のこれからの行動は？』

『まだターゲットとの接触は避けそのまま現状維持だ、何かあればその都度連絡をくれ』

『彼女にも伝えておきます』

『それでは通信を切るぞ。これからよろしく頼む』

『はい、了解しました“マクシミリアン・テルミドール様”』

そこで通信は切れた。

IS独特の駆動音を残し。

そして物語は加速する――

新たなる転生者によって引き起こされるものは――

世界の変革か、それとも

——破壊か。

t o b e c o n t i n u e d

<< N e x t C h a p t e r 2

1 - 10 (後書き)

今ままで放置していて申し訳ございません

これからは二週間に一度の頻度で更新していききたいなあとと思っています。

あと、時間の都合上感想への返信がしばらくできません。
しかし感想は毎度しっかりと見させてもらってますので、
何か意見等がございましたら感想宜しく願います。

それではこれからもこの小説を宜しく願います

m (— —) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5251q/>

IS last Glint

2011年6月20日21時17分発行